

分子科学研究所所長招聘会議「化学の魅力を小中高校生に、社会に、伝える」

2024年6月4日（水）の午後に、分子科学研究所所長招聘会議として、公開シンポジウム「化学の魅力を小中高校生に、社会に、伝える」が行われました。日本学術会議化学委員会の活動の一つとして、分子科学研究所、日本化学会戦略企画委員会との協力事業として、例年行われているものの一環です。これまでもこのシリーズのシンポジウムでは何回か、人材育成に関するテーマ、特に博士課程学生を増加するには何が必要かを議論してきました。そうした取組の中で、我が国の科学技術水準の源泉となる高度な人材の育成、大学院の活性化には、遡って初等中等教育と、それを取り巻く社会全体の取り組みが必要ではないかという考えに至り、今回表題のようなテーマを取り上げました。中でも、化学は理科系の学術の基盤となる分野の一つであり、物理学、生命科学等にわたる様々な学術分野との極めて多様な接点があり、環境学も化学を抜きにして語ることはできない側面があります。日常生活でも多くの最先端化学の成果が身近に利用されています。しかしこの身近さ故

もあってか、化学を志す学生数は伸び悩んでいる現実があり、この状況は将来の学術全体に影響を及ぼす可能性も危惧されます。今回のシンポジウムでは、化学分野にとどまらず、広くサイエンスの重要性和将来性、魅力を、これから進路を決めようとする若い世代に伝えるための方策を考えることを軸として企画しました。会議はハイブリッド形式で開催され、現地・オンライン合わせて120名ほどの参加がありました。

講演者として、文科省で広報などを担当されている小野賢志氏、日本化学会でアウトリーチ担当として積極的に活動されている京都大学の近藤輝幸教授、予備校等で化学の教鞭を取り、様々なメディアでも化学と科学の普及の活動を展開されている坂田薫氏、化学専攻で大学院を修了後に新聞社の科学部で記者を務められている杉森純氏をお迎えすることができました。様々な角度から化学の魅力を伝えるための取り組みについて、それぞれの経験に基づ



いて語っていただき、最後に総合討論として、化学・科学の魅力を伝えるために何が必要かを、会場の参加者を交えて議論しました。社会における科学・化学への興味の障壁となっている、科学に対する恐怖や無関心の実情、それを払拭するために必要な、科学の「キラキラ感」「ワクワク感」を見せることの重要性など、今後の化学・科学のアウトリーチ活動のための指針について、有効な議論がなされたと感じました。

日本学術会議化学委員会では、今回の議論の結果を元に、実際に若年層や社会に向けた化学への興味を惹くイベントの取り組みを実施できないか、検討することとしています。

（岡本 裕巳 記）

スピン生命事業の紹介

スピン生命フロンティアの概要

磁気共鳴装置と研究者が分野を超えて集結した「スピン生命フロンティア」は、岡崎3機関からなる「スピン生命科学コア」と、他機関との連携プロジェクトである「スピン生命フロンティア

ハブ」で構成されています。

スピン生命科学コア

2024年7月に岡崎共通研究施設内に「岡崎連携プラットフォーム」が構築され、その中にスピン生命科学コアが

組織されました。コア長には鍋倉生理学研究所長（2025年度からは伊佐生理学研究所長に交代）が着任しています。

2024年度末現在、分子科学研究所から8名（教員2名、特任研究員2名、技術職員4名）、生理学研究所から10